

Winnie-the-Pooh を教材としたテーマ学習

筑波大学附属駒場中・高等学校 英語科
八宮 孝夫

Winnie-the-Pooh を教材としたテーマ学習

筑波大学附属駒場中・高等学校 英語科

八宮 孝夫

要約

Winnie-the-Pooh は、詩や言葉遊びに満ちた、大人が読んでも楽しい作品である。中学の通常授業で扱うのは分量的にもやや困難であるが、テーマ学習という希望者が少数で集まって輪読することは可能である。教科書に出てこない表記や言葉遊びに接することで、参加者の言語に対する意識は確実に向上する。本稿では、*Winnie-the-Pooh* の読みどころとテーマ学習での展開、参加者の発表について述べる。

キーワード：言葉遊び、談話的展開、詩のリズム、会話のストラテジー

1. はじめに

数年前、40 半ばで初めて *Winnie-the-Pooh* を読んだ。日本語でも読んだことがなく、ディズニーのアニメでも見たことがなかった。それだけに、子供向けの物語と思って読み始めたところ、まったく新鮮な驚きを与えられた。もちろん、子供が読んでも楽しい話である。しかし、大人が読んでも充分楽しめるような言葉遊びの数々、さまざまな詩、会話の妙、登場人物の個性のバリエーションなどに満ち満ちている。ぜひ、授業で生徒と読んでみたいと思った。しかし、通常の授業で扱うには少々長すぎる。しかも、ただ意味が取ればいい、という作品ではない。また、あまり文法的な解説をするようなこともしたくない。そうこうするうちに、数年たってしまった。そんな折、2006 年度、中 3 のテーマ学習を担当することになった。

中 3 といえば、おおよそその文法事項は出てくる。また、小さいころ「プーさん」の話は読んだり見たりしているかもしれない。また、そもそも、興味のある生徒が集まるのだから、多少長いものもクリアできるであろう。テーマ学習の表題は「英国児童文学を読む」として、オリエンテーションでは *Winnie-the-Pooh* を紹介しながら、*The Chronicles of Narnia* や *The Hobbit*、*Alice's Adventures in Wonderland* など選

択肢に入れて、参加者を募った。結果、14 名の生徒が集まり、また *Winnie-the-Pooh* を読むのでよい、ということになった。

本稿では、*Winnie-the-Pooh* の読みどころと、ほぼ 8 ヶ月のテーマ学習で行った実践について述べる。

2. 第 1 章 *Winnie-the-Pooh* の導入

2.1 *Winnie-the-Pooh* の背景とテーマ学習日程

Winnie-the-Pooh の作者 A.A. Milne は、自分の子供 Christopher Robin Milne とぬいぐるみのクマに触発されて、Pooh の物語を書いた。2 シリーズあり、1 つは *Winnie-the-Pooh*、もう 1 冊は *The House at Pooh Corner*、また関連した詩集がもう 2 冊ある。つまり、全部で 4 冊である。これらすべてをテーマ学習で扱う余裕はない。結局、*Winnie-the-Pooh* 1 冊だけを輪読することにした。しかし、これ 1 冊でもそれぞれが独立した話が 10 章あり、平均 10 ページ強あるので、中学 3 年生にはかなり負担になるかと思われた。

ほぼ 8 ヶ月のテーマ学習というと長そうであるが、大まかに言えば月 1 回、2 時間ほどである。以下に、日程を示す（毎回土曜日である）。

© 2006 年度テーマ学習日程

6月3日：テーマ学習オリエンテーション

6月17日(2hrs)：第1回 Chapter 1 we are
introduced to Winnie-the-Pooh and some bees

9月16日(2hrs)：第2回

Chapter 2 Pooh goes into a tight place

10月14日(2hrs)：第3回

Chapter 3 Pooh and Piglet go hunting

11月18日(2hrs)：第4回

Chapter 4 Eeyore loses a tail

1月13日(4hrs)：第5回

Chapter 5 Piglet meets Heffalump

Chapter 6 Eeyore has a birthday

1月27日(4hrs)：第6回

Chapter 8 Christopher Robin, to the North Pole

まとめ：Comments from each student

2.2 第1章の扱い

第1回は、*Winnie-the-Pooh* の内容への導入とともに、書かれた英語のレベルへの導入でもあった。そこで、いきなり原文だけでは難しいと思い、注釈をふんだんにつけたものを用意した。いわば、補助輪をつけて自転車に乗る心持ちである。幸い、*A.A. Milne* (谷本誠剛他 2002)が、ミルンの紹介とともに、いくつかの詩、および *Winnie-the-Pooh* 第1章の注釈つき読み物になっているので、これを利用することにした。第1回目の流れは以下のとおりである：

- 1)自己紹介(この講座に期待するもの、読んでみたいもの)
- 2)作者の Milne 紹介(短い文章を読む)
- 3)第1章黙読(注釈を便りに各自で読んでみる)
- 4)ディスカッション(内容について、疑問点、意見を言い合う)

なお、朗読を味わうのも非常に大切なことなので、*Winnie-the-Pooh read by Alan Bennett* (BBC Radio Collection)を使用して、黙読の後に聞かせた。この朗読は簡略版 (abridged) で、ところどころ端折ってあるが、BBC で放送されて好評を博したものであるので、利用することにした。

第1章は、*Winnie-the-Pooh* の名前の由来について、作者の Milne が息子の Christopher にせがまれて話を始めるような形で始まり、次第にお話に入っていく、最後はまた父と息子の場面という「枠構造」(谷本 P91)

になっている。登場人物は Pooh と Christopher Robin のみで、Pooh が好物の蜂蜜を取ろうと、ミツバチの群がる木に登っていくさまを面白おかしく伝えている。

Winnie-the-Pooh で大切なのは、ただストーリー展開の面白さでなく、言葉遊びの面白さがふんだんにあることだ。第1章でも、例えば “*Winnie-the-Pooh lived in a forest all by himself under the name of Sanders*” という文がある。Under the name of～は通常「(ペンネームなど)～という名で」という意味だが、挿絵を見るとまさに Sanders という名の表札の下に Pooh が住んでいるのだ。

その挿絵も Ernest H. Shepard によって、作者の意向に沿った形で描かれている。例えば、Pooh が蜂蜜を求めて木に登っていく挿絵とその描写 “*He climbed and he climbed and he climbed,...*” のコンビネーションは素晴らしい。そこでは、大きな絵の脇に “He” “climbed” “and” と1語づつ行を変えて配してあるので、読者の視線は文を読みながら次第に下に降りていき、同時に絵の中で木につかまっている Pooh は相対的に、ゆっくり木に登っていくように感じられるのだ。

言葉遊びのもう1つの特徴は、詩があちこちに出てくることである。上で述べた木登りのシーンに続くところで以下のような (Pooh 自作という形の) 詩が登場する。

Isn't it funny

How a bear likes honey?

Buzz! Buzz! Buzz!

I wonder why he does?

非常に意味もわかりやすいし、リズムもいい。そして韻も踏んでいる。Rhythm と rhyme という詩の特徴が端的に示されている。今日にいたるまで、日本の英語教育では詩の扱いというのが非常に消極的である。教科書の扉に申し訳程度に Browning の詩が載っていたりするが、どう扱うかは明確でない。高校の教科書で、まれに Poetry for you というような課があるが、今度はいきなり Wordsworth の “Rainbow” などが登場する。どうしても敷居が高い。*Winnie-the-Pooh* に出てくるこのような詩から入って、まず音の響きの面白さ、リズムの心地よさを実感させることが大切なのではないだろうか。

第3の言葉遊びは一言言葉遊びというのは適切でないかもしれないが一文の展開の面白さである。Pooh は子供向けにしては、文の展開のちゃんとした、(Pooh

なりの)論理展開が働いている場合がある。ミツバチのブンブン言う音を聞いて Pooh は考える：

“That buzzing-noise means something. You don’t get a buzzing-noise like that, just buzzing and buzzing without meaning something. If there’s a buzzing-noise, somebody’s making a buzzing-noise and the only reason for making a buzzing-noise that I know of is because you’re a bee. And the only reason for being a bee that I know of is making honey. And the only reason for making honey is so as I can eat it.”

ここで、“the only reason …”で始まる3つの文は、主語が長くて、何かまどろっこしい印象を与える。しかし、ここではそれが、まさに Pooh の思考ののろさを感じさせていい効果を生んでいる。また、その後どんな陳述が続くのかを読者にわくわくさせるサスペンスもあり、その陳述が大したことがないので anticlimax の効果も上げている。一般に、英語では主語が長い「頭でっかちの文」は避けられる傾向にあり、<It ~to ...構文>の代理の it などはそのように説明される。しかし、実際は単純な長さの問題ではない。上の Pooh の文が、まどろっこしくはあるが文として不恰好ではないのは、主語の大部分が、その直前の情報を受けて繰り返しているだけの旧情報なので、読者には負担にならないのだ。むしろ、そういうパターンが3度続くことで独特のリズムを醸し出している。したがって、「頭でっかち」云々を言う場合は情報構造の視点も考慮する必要がある。上の文はその好例と言える。

第1回の輪読が終わり、この文章なら、辞書を引きながらなんとかかなりそうだとことを確認したあとで、次回からの担当レポーターを決めた。また、以下のことを指示した。

☆ 次回の担当（レポーター）について

・意味を良く調べて、他の生徒の質問に答えられるようにする。

・B5 版程度の要約を作る。

・特に自分が印象に残ったところを解説する。

☆ 他の生徒

・予め、その章を読んでおく。分からないところを質問する。

・どんな印象を持ったか、感想を言い合う。

3. 第2章と談話的な展開、表記法と音声化

3.1 談話的な展開の例

この章は、Pooh が Rabbit の穴を訪ねて、そこで蜂蜜を食べ過ぎ、出口のところにはまってしまい、Christopher Robin を始めとする仲間が救出するという話である。2名のレポーターは大筋についてはわかったようで、要約を用意していた。1名は全訳をしていた。全体の意味は取れるものの、細かいところは曖昧な点が多かった – というか、*Winnie-the-Pooh* の持つ文章の工夫に気づいていなかった。例えば、一見何の変哲のない以下のような対話である。（Pooh が Rabbit を訪れて、いるかどうか聞いている場面。なお下線は筆者）

P: Is anybody at home?

(scuffling sound, then silence)

P What I said was “Is anybody at home?”

R: No! You needn’t shout so loud.

P: Isn’t there anybody here at all?

R: Nobody.

P: (there must be somebody, because somebody must have *said* “nobody”)

Hallo, Rabbit, isn’t that you?

R: No. (in a different sort of voice)

P: But isn’t that Rabbit’s voice?

R: I don’t think so. It isn’t meant to be.

P: Oh! Well, could you kindly tell me where Rabbit is?

R: He has gone to see his friend Pooh Bear, who is a great friend of his.

P: But it *is* Me!

R: What sort of Me?

P: Pooh Bear.

R: Are you sure?

P: Quite, quite sure.

R: Oh, well, then, come in.

ここでは、在宅かどうかを尋ねるのに、相手の反応で Pooh は実に色々なバリエーションで聞き返しているのが面白い。もちろん、相手の反応もどんどん変化するので相乗効果がある。まずは、無色透明の質問として Is anybody at home? と問う。それに対してただごそごそ音がして後は沈黙。Pooh は確認の意味で What I said was “Is anybody at home?” という。単に Is anybody at home? とだけ言っているのではない。

それに対して No! の答え。今度は *Isn't there anybody here at all?* と否定疑問文で尋ねる。ここで、生徒に始めの質問と否定疑問文ではどういう違いがあるかを聞いてみたが、あまりはつきりとした回答が得られなかった。否定疑問の方は「相手がいる」と言うことを前提としての発言であり、それぞれの発言は Pooh の感情を反映しているのだ、ということを指摘した。以下、やはり返事の相手は Rabbit であろうという気持ちが働いているので *Isn't that you? Isn't that Rabbit's voice?* と否定疑問で尋ねている。ここが、もし *Is that you?* になると全くおかしいことになってしまう。Rabbit のほうも、単に No から Nobody と変わり、特に面白いのは「ウサギの声じゃないの？」に対して *I don't think so. It isn't meant to be.* と、いかにも第 3 者であるかのように答えながら *it isn't meant to be* は本人の立場で答えているようでもあり、しっかり正体を表している点だ。ところが、Pooh はそれを疑わず、相手がそこまで言うなら、返事の主は Rabbit 以外のものと認識を改め、そうなると突然質問の仕方も見知らぬ人に尋ねる丁寧な形になっている。それが、*Well, could you kindly tell me where Rabbit is?* である。Pooh は “Bear with little brain” という設定だが、対人関係の表現の違いなどは非常によく使い分けている。このような、心的変化が表現の変化に反映する、ということも、あまり学校の授業で教えられてこなかったと思われるし、そもそも教科書にそのような例が出てこないのだ。

3.2 表記方と音声化 - イタリック体の意味

上の対話で、Rabbit が、「彼は友人のプーさんに会いに行ったよ」と返事した時、Pooh が *But it is Me.* (そもそも僕がその相手のプーだよ) と答える際、そこにイタリック体や(文中なのに)大文字での表記が出てくる。生徒は、これにも面食らったようで、質問してもピンと来ていなかった。ある特定の単語を強調したい場合その語をイタリック体にするが、文全体を強調したい場合は (be 動詞がある場合は) その be 動詞が強く読まれ、表記の際はイタリック体にする。上の発言の場合、「(君の言っているその)プー本人だ」ということで *me* も強調したいために、そちらは大文字で始めている。このように、文字化された文章には、音声に伴わないことを補完するために表記上様々な工夫があり、黙読する際もその表記を踏まえて、耳にはそのリズム・

イントネーションが響いていなければ、正しい解釈・鑑賞は出来ない。この点も、学校の英語教育で欠けている点であろう。

この章の終わりには、Pooh が皆のおかげで穴から引っ張り出されて、めでたし、めでたしとなるのだが、その引っ張り出す場面は、あの「大きなカブ」を思い起こさせる。そこでインターネットから英語版 (*The Enormous Turnip*) をダウンロードし、残りの時間で扱った。これも、独特のリズムがあり、一つのパターンで書かれているため、全員で音読するのに適した教材である。たまたま、ロシア語版をラジオのロシア語講座でやったばかりだったので、そちらも聞かせてみた。ロシア語では、単語によって格変化があるため、語尾が自然に韻を踏むような現象があり、音の楽しさを教える上では英語に限らず扱ってみてもいいのではないと思われる。

4. 第 3 章と言葉遊び、音の持つイメージ

4.1 言葉遊びの例

この章では Pooh の友人 Piglet が登場する。話自体はたわいもなく、Pooh がある木の周りをまわっているうち、何者かの(実は本人の)足跡に気づき、それを求めてさらに木の周りをまわっているところに Piglet が合流し、2 人が怖がっているところを Christopher Robin にたしなめられる、というもの。ここでは、言葉遊びと音の持つイメージに注目させたい。

第 3 章の言葉遊びはちょっと高度である。Piglet の家には “TRESPASSERS W” という立て札があるが、それを自分のお爺さんの名前と思い込んでいる。いわく、W は Will でさらには William の省略形であるから、お爺さんの名前は *Trespassers William* だ、というのである。レポーターは、これを単なる名前と思って解釈しており、また他のメンバーでも異論を唱えるものがいなかった。「trespass の意味を辞書で引いてごらん」と指示したところ、生徒の持っている電子辞書でこの語が載っている機種が一つもなかった。結局研究社の大英和を引いて「罪を犯したもの; 許可なく他人の土地に侵入する者 - *Trespassers will be prosecuted* 侵入者は訴えられます(掲示板)」ということを導いた。ここに至って、Piglet の家の立て札はどこかの掲示の切れ端を取ってつけたものだということが了解された。この言葉遊びがどのような日本語に移し変えられてい

るか、石井桃子氏(2000)の訳をみると「トオリヌケ・キ」となっており、Pigletのお爺さんの名を「トオリヌケ・キンジロウ」としていて、見事に言葉遊びまで訳出されていた。この言葉遊びの深さは、生徒にインパクトを与えたようだった(今回の終了時に書かせた感想に、このことに触れたものが多かった)。

以降のレポーターは、言葉遊びがあると日本語にどのように移し変えるか、意識していたものが多くなった。このように、言葉遊びは自国語への意識も高める効用がある。

4.2 音のイメージ

もう1つの、音のイメージの例は、Poohが何者かの足跡と思っている、その何者かをWoozleという名で呼んでいることである。なんとなく、Woozleには背中をぞくぞくっとさせるような響きがある。ちなみに、woozyという単語があるがその意味は“feeling unsteady, confused and unable to think clearly”とある。また、さらにちょっと小ぶりの足跡に遭遇した際、今度はWizzleだと説明する。これも、Woozleの持つ後舌母音のほうがWizzleの前舌母音より、広がりを感じ大きいイメージがあることから納得の行くことである。“gl-”ではじまる単語は「キラキラ、ギラギラ」というイメージのものが多し(glare, gleam, glint, glitter, etc)、“sl-”ではじまる単語は「スルスル、ヌルヌル」するイメージのものが多し(slide, slime, slip, slither, etc)。このように舌と口腔で作られるある特定の音はイメージが共通する場合がある。これも、言葉への意識づけの一つの側面であろう。

4.3 句読法について

第2章でも出た表記上のことで、もう1つ付け加える。PoohとPigletが得体の知れぬものを追跡している時に、もう1つ得体の知れぬものの足跡が加わる。そのときのPoohの台詞は以下のとおりである(下線は筆者)：

“It’s a very funny thing, but there seems to be *two* animals now.

This – what-ever-it-was – has been joined by another – what-ever-it-is – and two of them are proceeding in company.”

上の下線部にはダッシュとハイフンが使われており、レポーターの生徒はどう解釈したらいいかわからなか

ったのだ。確かに教科書では、このようにハイフンでいくつもの単語がつながれているケースはまず出てこない。しかも、ここではその前後にダッシュまで使われている。わからないのも無理はない。ダッシュやハイフン、コロン、セミコロンなど、いわゆる句読法(punctuation)についても、もっと教える機会が必要ではないだろうか。

なお、内容的には得体の知れないものを探る場合、読者は登場人物を追体験してスリル感を味わうのが普通だが、ここでは自分の足跡をぐるぐると追いかけるので、追いかければ追いかけるほど、登場人物の行動がこっけいに見えて「いいかげん気づけよ、プー」とでも言いたくなってくる。そこが面白い。もちろん、子供の中には自分の足跡を追っているとは気づかず、Poohとともに、わくわくしながら得体の知れないものを追いかけ、最後に「なーんだ」ということになるかもしれない。そういう楽しみ方も全くありうることであるし、中学3年生でも話し全体が見えていないと、最後までオチに気づかないものもある。感想の1つに「今回は訳して呼んでいるだけで考えなかったのが最後までわからなかった。今度はもっと考えて読みたい」というのがあった。

5. 第4章とキャラクター、言葉遊び2

5.1 キャラクターの面白さ

この章では、ロバのEeyoreとフクロウのOwlが登場する。Eeyoreは自分のしっぽがなくなり、ふさぎこんでいる。もともとメランコリックな性格であるらしい。そこでPoohがしっぽを探しに出かけ、Owlに相談する。結局、Owlのドアの呼び鈴のヒモ代わりにしているのがEeyoreのしっぽとわかり、持ち主に返す、というもの。

ここでは、まず登場人物のキャラクターの面白さがある。Eeyoreも、Pooh同様、思考回路がとろいところがあるようだが、Poohが基本的に楽天的なのとは対照的に非常に悲観的なところがある。また、やけに哲学的なことを言うそぶりがあると思うと、一方で相手の言葉の字句どおりに反応して、うまくコミュニケーションが取れないところがある。例えばPoohの挨拶“How are you?”に対して、“Not very how.”などと答える。Poohが相談に行くOwlも面白いキャラクターの持ち主である。森で一家言あるものと思われていながら、実際は字もまともに書けず、やたらとhard

words を使って相手に煙に巻く – 落語で言う町内のご隠居さんのようなイメージだ。呼び鈴に書いてある注意書きも実は Christopher Robin が書いたものだが、それ自体がむちゃくちゃなつづりなのに、誰も正しいつづりがわからないので、そのまま通ってしまっている、というのもそれぞれのズレが微妙に重なり合っているほほえましい。

5.2 言葉遊びの例 2

言葉遊びとしては、上に述べた Eeyore の字句どおりに取る部分が 1 つ。もう 1 つは、Owl が用いる硬い言葉を Pooh が知らないため、自分の知っている単語に近いものに聞き間違える、というのがある。例えば、「どうしたらイーヨールを助けられるだろう」という質問に Owl が答える場面（下線は筆者）：

Owl: Well, the customary procedure in such cases is as follows.

Pooh: What does Crustimoney Proceedcake mean?
For I am a Bear of Very Little Brain, and long words Bother me.

Owl: It means the Thing to Do.

上の下線のように、Pooh は procedure を proceedcake(=seedcake?) と好物の食べ物に聞き違えてしまう。ただ、Owl も硬い言葉を使わなくても the Thing to Do と初めから言えば済むことなのだ。このやりとりに続く場面が秀逸の言葉遊びになっている（下線は筆者）：

O: The thing to do is as follows. First, Issue a Reward. Then –

P: Just a moment. *What* do we do to this – what you were saying? You sneezed just as you were going to tell me.

O: I *didn't* sneeze.

P: Yes, you did, Owl.

ここでは、Issue a Reward として「(しつぽを探した人に) 報酬を出すこと」を提案する。ところが、Pooh は issue がわからず、achoo というくしゃみの音と聞き違えてしまうのだ。ここはまさに、いかに *Winnie-the-Pooh* を音で聞くものとして味わっているか、ということが重要になってくるころだと思う。耳に issue という音が響かなければ、音より先に issue=発行する、と頭で訳してしまったならば、この言葉遊びは理解できないであろう。個人的には、こ

の言葉遊びが一番気に入っている。また、ここを日本語版で読むと「まず、薄謝を贈呈することとする」としてあり、reward の部分を「薄謝」とすることで「ハクシヨツ」に近づけているのはさすがである。

言葉の中には、文脈に適したある言語使用域(register)があり、丁寧な形、といわれているものでも親しい人との間で用いれば却って「ちぐはぐ感」が出ること、という点も言葉の意識づけとして大切なことである。

5.3 Nursery Rhyme の効用

また、今回残った時間に Nursery Rhyme にある“Three Blind Mice”を扱った。音に対する意識づけという目的もあったが、文化祭でクリスティの『ねずみとり』を演じたクラスの生徒がおり、その中でこの詩が重要な役割を果たしているのも、原文を紹介する意味もあった。歌詞は以下のとおり：

Three blind mice, three blind mice,
see how they run! see how they run!
Who cut off their tails with a carving knife,
Did you ever see such a thing in your life,
As three blind mice, three blind mice.

テープを 2, 3 回かけると、リピートの指示もしないのに生徒がどんどん歌い出したのには驚いた。節を知っていたということも大きかったろうが、やはり原文の音の面白さが大きいのではないかと思う。Who cut off...のあたりは、決して易しくないのだが、結構順応して、3 グループに分けて輪唱までしてしまった。あらためて、詩のリズムのもつ魔力に驚かされた。中学の低学年で、こうしたリズムに浸らせることは大きな意味があるのではないかな。

6. 第 5 章とストーリー展開と多様な朗読

6.1 この章の概要とストーリー展開の面白さ

第 5 章は、Christopher Robin が、何気なく(carelessly)「今日 Heffalump を見かけた」という。そこで、Pooh と Piglet は自分達も知らないその生き物を捕まえる計画を立てる。蜂蜜をおとりに落とし穴に落とすことにし、Pooh は蜂蜜を取りに行くが帰る道々、平らげてしまい、ほぼ空になった蜜壺を穴に入れる。2 人は翌朝会う約束をしそれぞれ家に戻るが、Pooh は Heffalump が蜜を平らげている夢を見て夜中に目が覚め、(自分が既に平らげているのにもかかわら

ず) 不安になって、穴に戻る。一方、Piglet は夢で Heffalump のイメージが膨らみすぎ疑心暗鬼になり、Pooh より先にとりあえず穴の様子を見に行く。そこで蜜壺が抜けずにもがいている Pooh を見て Heffalump と思い込み、慌てふためいて Christopher Robin に助けを求め、その正体が明らかになる。

粗筋だけでも、今までより長くなってしまったことでわかるとおり、第 5 章からは話がより長く複雑になる。2 人の掛け合いや、別れた後の Heffalump に対する夢の違いなどがおかしい。特にこの章は Piglet のほうにより焦点が当たっているので、彼の小心者である点が、色々な描写から読み取れる。やはり、Heffalump という音の響きの持つ怖さがあると思う。何となくふわふわした巨大なカタマリのようなイメージだ。特に疑心暗鬼になった Piglet が実際に Heffalump と思いきものを見て、助けを求める時のあわてぶりがいい。以下のとおり (下線は筆者) :

Pig: Help, help, a Heffalump, a Horrible Heffalump
Help. Help, a Horrible Hoffalump.
Hoff, Hoff, a Hellible Horralump
Holl, Holl, a Hoffable Hellerump!

始めは Horrible Heffalump だったのが、どんどん音が入れ替わってしまい、最後は Hoffable Hellerump になってしまう。こういうのは理屈なく楽しい。

6.2 朗読のバリエーション

また、この章には Pooh の Hunny(=honey)の歌も出てくる。実は、大抵の詩の朗読は前述の Bennett の朗読では割愛されている。ところが、*Winnie-the-Pooh* の朗読の Unabridged version を見つけたので、詩の部分は、そちらの朗読を聞かせた。Peter Dennis が読んでいるもので、Christopher Robin Milne 自らが、推薦している (A.A. Milne's POOH CLASSICS, Blackstone Audiobooks)。Bennett に比べると、読み方が少し速い。また、Piglet の台詞はいちいち“oink”という鼻を鳴らす音が入るので、少し耳障りと思う人がいるかもしれない。ただ、これが絶対という朗読はないので、色々な朗読を聞き比べるのはいいことだと思う。

面白さに紛れて見落としがちだが、Pooh の話には、いかにも詩的な自然の描写がところどころにある。この章では、Pooh が明け方落とし穴に戻る際の、あ

りの様子は以下のとおり :

The Sun was still in bed, but there was a lightness in the sky over the Hundred Acre Wood which seemed to show that it was waking up and would soon be kicking off clothes.

明け方の見事な—しかし子供にもイメージし易い—比喻ではないだろうか。Mark Twain の *Tom Sawyer* の中に 2 ページにわたって森の夜明けの描写があるが、優れた作家の描写というのは、イメージが膨らみ実体験しているようで気持ちがいい。

7. 第 6 章と会話のストラテジー、心の動き

7.1 この章の概要

第 6 章は、Eeyore が自分の誕生日なのに誰も祝ってくれないと嘆いているところを Pooh が通りかかり、家に戻ると Piglet がいたので誕生日のことを告げ、自分は蜂蜜をプレゼントするという。Piglet は風船にしようと決め、家に戻る。Pooh は蜜壺を抱えて Eeyore の家へと向かうが、陽気がよく、お昼の時間も近づきつい蜂蜜を平らげてしまう。仕方ないので、空の壺に「誕生祝い」と書いてもらって送ろうと Owl のところに行く。ここでの Pooh と Owl のやり取りが読みどころ。一方 Piglet は風船を抱えて Pooh より先んじようと急ぐのだが、石につまづき転んで風船を割ってしまふ。気まずい思いで Eeyore のもとへ行く。恐る恐る、途中で風船を割ってしまったことを打ち明ける。がっかりすると思いきや、Eeyore はそれが気に入り、おりしも Pooh がプレゼントの壺を持ってくる。普通の風船なら入らないのに、破れた風船なので壺に入れることができ Eeyore は出し入れして大喜び。Pooh と Piglet もホッとする、という話。この章では久々、最後に父と息子の会話が飛び出す。

この章も結構長い話だが、ストーリー展開より会話の間とかストラテジーに面白さがあるように思われる。第 5 章は現実には起こり得ないようなストーリーだったが、第 6 章の状況は現実にも起こりうるものである。風船とか壺でないにしろ、誰かにプレゼントをする際、他の人と同じものを用意してしまったり、贈ったものに傷がついていたりして、気まずい思いをしたりすることは誰にでもあることである。そういう状況を考えながら、この章に出て来るやり取りを見ると、その間やストラテジーの巧みに改めて気づくと思う。

7.2 会話のストラテジー

まず Eeyore と Pooh の会話で始まる。相変わらず Eeyore の発言はわかりにくい。ところどころ、突然 Nursery Rhyme の一節が入ったりする(Here we go 'round the mulberry bush)。Pooh もどう反応したらいいかわからず、次のような詩を歌う：

“Cottleston Pie”

Cottleston, Cottleston, Cottleston Pie,

A fly can't bird, but a bird can fly.

Ask me a riddle and I reply:

‘Cottleston, Cottleston, Cottleston Pie.’

2行目の A fly can't bird, but a bird can fly.などはナンセンス詩という気もしなくはないが、韻を踏んでいてリズムよく、なにか頭に残る詩である。そのあと、Eeyore は Pooh に自分の誕生日であることを告げるのであるが、その持っていく方が結構巧みである。以下のとおり：

Pooh: You seem so sad, Eeyore.

Eeyore: Sad? Why should I be sad? It's my birthday. The happiest day of the year.

Pooh: Your birthday?

Eeyore: Of course. Can't you see? Look at all the presents I have had. Look at the birthday cake. Candles and pink sugar.

Pooh: Presents? Where?

Eeyore: Can't you see them?

Pooh: No.

Eeyore: Neither can I. Joke. Ha, ha!

架空のプレゼントを見せられて、「冗談さ」と言われれば、相手は「何かプレゼントしなくては」という気持ちになるのも当然である。Eeyore は天然ボケのようなどころがあるから、何もたくらんでやったわけではないのだろうが、普通に考えると、あるストラテジーが働いているように思える。

次に Pooh がプレゼントするつもりだった蜂蜜を平らげてしまって Owl のところに行き、蜜壺に“A Happy Birthday”と書いてくれと頼む場面。Owl はもちろんつづりに自信がないのだが、そんなことはおくびにも出さず、次のように言う：

Owl: Can you read, Pooh? (a little anxiously)
There's a notice about knocking and ringing outside my door, which Christopher Robin wrote. Could you read it?

Pooh: Christopher Robin told me what it said, and then I could.

Owl: Well, I'll tell you what *this* says, and then you'll be able to.

Owl は字が読めるか直接聞くことはせず、しかし、Pooh が字が読めないと確認してから、自分の不正確なつづりで書くのである。ここにも会話のストラテジーがあり、Owl の老獪振りがうかがえる。

7.3 会話の間、心の動き

Piglet が、仕方なく Eeyore のところに破裂した風船の残骸(damp rag)を持っていく場面で、次のような会話がある：

Piglet: Many happy returns of the day.

Eeyore: Meaning me?

Piglet: Of course, Eeyore!

Eeyore: My birthday? (しばらく続いて)

Piglet: A present.

Eeyore: Meaning me again?

Piglet: Yes.

Eeyore: Me going to have a real birthday?

Piglet: Yes, Eeyore, and I brought you a balloon.

Eeyore: Balloon?

肝心の風船が割れているのを知らせて、

Piglet: I burst the balloon! (長い沈黙)

Eeyore: My balloon? (Piglet nodded) My birthday balloon?

Piglet: Yes, Eeyore. Here it is. (damp rag を渡すと...)

Eeyore: Is this it?

Piglet nodded.

Eeyore: My present?

Piglet nodded again.

Eeyore: The balloon?

Piglet: Yes.

Eeyore: Thank you, Piglet.

少々引用が長くなったが、Piglet と Eeyore の短いやり取りには、ある緊張感がある。とりわけ、風船をプレゼントすると喜ばせておいてから、その肝心の風船が破裂していると言った後の Eeyore の“Is this it?” “My present?” “The balloon?”と聞き返す様子は、状況やイントネーションによっては、ひどく恐ろしい状況にも思える。つまり、「こんな破裂したものが、僕への

プレゼントだって？バカにするな！」というような反応も十分考えられるのである。しかし、最後は“Thank you”ということで、読者は「やれやれ」と思うのである。ここでは会話の「間」が非常に重要になってくる。

Eeyore に感謝されたものの、どこか後ろめたい Piglet だったが、そこに Pooh が現れ、こちらは何の後ろめたさもなく蜜壺をプレゼントする。Eeyore は、こちらにも気に入り、しかも風船が入るので、出し入れに夢中になる。結局めでたしなのだが、普通に考えると、プレゼントを贈った側も贈られた側もひどく気まぐずになりそうな状況で、みんな適度にズレている結果、丸く収まったという印象で、この章の面白さはそんなところにもあるのではないだろうか。

7.4 生徒の感想

生徒の感想としては「イーヨーとピグレットの風船の時の会話が面白かった。イーヨーの天然な雰囲気は読んでみると非常になごむことが出来た」「それぞれのキャラクターの特徴がフルに生かされていて楽しかった」「小心者のピグレットがふうせんをわって世界中が爆発したみたいだと思ったところがかっこよかった。むちゃくちゃな話だけどほのぼのしている」など。また、原文で Owl の Happy Birthday のつづりがでたらめなところは、レポーターも「おたんひゅひょうひ おめでと」などと訳しており、言葉遊びにも敏感になってきたことが伺えた。

8. 最終回：第8章と生徒の発表

8.1 この章の概要と言葉遊び

講座の最終回は第8章のレポートと講座を終えての生徒の感想など発表に当てた。なお、扱えなかった7章、9章、10章については、冬休みの課題として「どれか1つの章について要約と感想、そこに用いられている言葉遊びなどについてレポートを提出」するよう求めた。

第8章は Christopher Robin の提案で North Pole の探検(Expedition)に行こうというもので、これまでの全ての登場人物、総出演である。また、詩あり、言葉遊びあり、掛詞ありで、楽しませてくれる。

詩としては、始めの方で Sing Ho! For the life of a Bear! という調子のいい詩がある。また、単語の聞き違いとして Christopher Robin が Expedition と書いたのを Pooh は Expotition と思ってしまう。珍し

いところでは「Expotition には x がある」という意味で Pooh が It had an “x” と言ったところ、Piglet は It isn't their necks I mind と答える。つまり、an “x(=ecks)” → a necks と取っているわけである。これは言語学という異分析(metanalysis)という現象で、a nickname が本来 an ekename から来ているのはその例である。

掛詞の例としては Christopher Robin が “ambush” と言ったところを Pooh は bush(藪)の一種と思い、“gorsebush(ハリエニシダ)”のことを話題にする。つまり bush の部分に2重の意味を掛けているわけである。もう1つは、この章の話題の中心 North Pole の Pole に「北極」の「極」と「さお」の意味が掛けられている。もっとも、英国の子供達も North pole と聞くと北極点に何か目印の棒のようなものが立っていると思うらしいので、これはそのあたりを利用しての言葉遊びともいえる。

この章は、偶然とは言え pole を見つけた Pooh が最後はヒーローになる。第9章でも Pooh は Piglet を救出の立役者となる。その意味では第10章の Christopher Robin が Pooh party を開く伏線になっているともいえるのではないかな。

8.2 生徒の発表

最終回の後半2時間を生徒の発表に当てた。それでも、各回の終わりに短い感想は書いてもらっていたが、大抵は4~5行の感想で、それほどそれぞれの生徒独自の意見が出ているという様子でもなかった。全体を読み終えて、もう1度まとめてみるのも意味があることではないかと思ったのだ。実際発表させてみると、やはり色々な意見が出て興味深かった。人気キャラクターとして Eeyore の名が結構あがっていたのは少し意外であった。また、ディズニーのプー物語との違いについて指摘したものもあった。ディズニーランドの「プーさんのハニーハント」に行った体験談を述べたものもいた。

発表のポイントは以下のとおりである：

- ・「まとめ」として1人10分、発表を行う。
- ・内容①英語によるスピーチ(1~2分)

(例) My favorite Character in the story

②日本語による補足、言葉遊びなど研究したこと、原作とディズニーアニメの違い、この講座で発見したこと etc. (7分)

③テープの中の言葉遊びで、マスターしたものを1つ披露する。

いくつかの生徒の例を挙げる。(微修正を除き、ほぼ原文のまま)

Hello, everyone. The title of my speech is "Why does this Pooh story fascinate us?" When I read this book "Winnie-the-Pooh", I feel happiness and warmth. Maybe, everyone here feel them, too. So I thought why this story so fascinates us. There are two reasons, I think.

First, Pooh and their friends were friendly each other. There were many kinds of animals but everyone in this story was talking without thinking about their kind and condition. So when we read this book, we don't have to think without enjoying this story simply.

Next, the terms he and his friends used were interesting. I think Pooh was especially cute. His thought was meaningless, but it was his thought that we feel funny most. (3-A T)

Hello, everyone. Today, I'm going to tell you about my favorite character in the story and my favorite chapter of the book.

My favorite character in the story is Eeyore. He is an old gray donkey. He is gloomy. In chapter 4, his character appeared very well. But in chapter 10, he makes a mistake—he thinks the party is for himself. And then Eeyore, who is always gloomy, makes a speech cheerfully. But he is told "this party is for Pooh." Then he becomes gloom again. Because of this action and his character, I love Eeyore.

Next my favorite chapter of the book is chapter 10. There are four reasons.

First, there are all characters of the story in this chapter. Second, Eeyore's mistake is very funny. Third, Pooh thinks that "B" which is marked in pencil is for "Bear." This Pooh's character must be loved. Finally, in the end of this chapter, the scene of this story changes to (the one in which) A.A. Milne and Christopher Robin was talking. Readers are drawn to reality in this book.

(3-A M)

Hello, everyone. Today I'm going to tell you about difference between the original Winnie-the-Pooh and Disney version of Winnie-the-Pooh. There are many difference. First, Disney version of Winnie-the-Pooh is more fictitious than the original. For example, Chapter 2 "Pooh Goes Visiting and Gets Into a Tight Place". Lastly Pooh became free in the original, but lastly Pooh jumped too highly and he fitted in hole of the trunk and there were much honey in it in Disney version. Second, new characters appear in Disney version. They are *Tigger and Gopher. Tigger is a tiger. Gopher is a squirrel. Especially Tigger is an important character. The original is interesting. And Disney version of Winnie-the-Pooh is interesting, too. (3-B W)

* Tiggerは2冊目の *The House at Pooh Corner* で初登場するキャラクターなので、今回読んだ本では出てこなかった。Gopherは純粋にディズニーで生まれたキャラクターである。

My favorite chapter of the book is "Chapter 4 in which Eeyore loses a tail and Pooh finds one." I like it because in this chapter, Owl is a very important character and he is the most favorite character of mine. I'm going to tell you why I like him.

In this book, Pooh thinks that Owl is wise because he is very good at writing and reading, but actually he isn't really so good. He isn't sure of how to spell words, but he wouldn't say he can't spell them, because he wants everybody to think he is wise. He uses long words to say things. I like these ways of showing off, so I like him the best in this book.

In this class, we have been talking about word play, so I will tell you about word play in this chapter.

The first one is from Owl's lines. When Pooh asks Owl how to find the tail, Owl says, "First issue a reward..." and Pooh thinks that Owl sneezed when he was talking. Pooh thought Owl said "achoo." This word play makes me think the

writer is smart because the word “issue” really sounds like Owl sneezed.

The second one is from the poem. It says “at a quarter to two (only it was quarter to eleven, really).” This poem uses the word “two” because it rhymes with “Pooh.” I think the writer has a good sense of writing poems.

(3-B O)

My favorite chapter of the book is chapter 4. The title is “In Which Eeyore Loses a Tail and Pooh Finds One.” I like it because I think the characters’ personality is effective in this chapter.

Eeyore lost his tail and he looked sad. Then Pooh found Eeyore’s tail had been lost, so he looked for it. Pooh visited Owl. He asked him how to find the tail for Eeyore. But Owl used it for bell-rope. Pooh found it and got it back to Eeyore.

I think the punch line of this story is also funny. Owl got the tail in the forest. That is to say, Eeyore is unconscious of losing his tail. Then Christopher Robin attached it to Eeyore by nail. This means Eeyore is only a stuffed animal. But even so I think he is very insensitive.

Anyway this story is foolish and familiar for children.

(3-C A)

There are many characters in the story. So I will talk about the characters.

First, Winnie-the-Pooh. I think that he is one of the funniest characters in the story. He has very little brain, so he can’t understand difficult words, and sometimes he thinks of or does something very foolish. For example, he was going to use honey to capture a heffalump, but he thought that it might be something else, so he ate it a little, and all of it at last. Another time, he was going to give it to Eeyore as a birthday present, but he had forgotten what was it for, so he ate it. They mean he really likes honey too.

Second, Christopher Robin. He is A.A. Milne’s son, and only human in this story. He is only a boy, but cleverer than other characters. This story is

told by Milne to Christopher, and he does adventures in the forest.

There are many more unique characters, but those are two most important.

(3-C H)

9. おわりに

数年前に *Winnie-the-Pooh* の魅力に取り付かれて、今回「テーマ学習」という形で生徒と本を読んでみた。中学生でどのくらい読めるか不安な部分もあったし、最初のころは言葉遊びなどにも無頓着であったが、回が進むにつれて、言葉への意識は確実に高まったと思う。何より、Pooh の持つ魅力、言葉のリズムの快さなどに生徒が引っ張られたのが大きな要因だと思う。

機会があれば、今度は高校生のゼミなどでどんな反応があるか見てみたい。

【参考文献】

安達まみ(2002)『くまのプーさん 英国文学の想像力』(光文社)

石井桃子(2000)『クマのプーさん』新版、(岩波書店)

谷本誠剛、笹田裕子(2002) *A.A. Milne*

現代英米児童文学評伝叢書 4、(KTC 中央出版)

ドミニク・チータム (小林章夫訳) (2003)

『「くまのプーさん」を英語で読み直す』

(日本放送協会出版)